リヨンとヴィエンヌの教会の手紙

リヨンとヴィエンヌの教会
藤遥　制作

序、1章 1〜17節　迫害の始まり

5:0:1 さて、ローマの教会の監督ソテルは、八年目まで教会を導いたのち、生涯を終えた。そのあとを、使徒たちから数えて十二代目のエレウテロスが継いだ。それは皇帝アントニヌス・ウェルスの十七年目のことであった。この年、地のいくつかの地方では、町ごとの民衆が襲いかかったために、私たちに対する迫害がいっそう激しく燃え上がった。そのため、世界の至るところで幾万もの殉教者が際立った働きを見せた。そのことは、一つの民族のあいだで起こった出来事から推し量ることができる。それらの出来事は書き記され、後の世の人々に伝えられることにもなった。まことに忘れられることのない記憶にふさわしいものだったからである。5:0:2 さて、これらのことを最も詳しく述べた書物は、その全体を、私が編んだ殉教者たちの記録集に収めてある。その書物は、歴史の話だけでなく、教えとなる話も含んでいる。ただ、いまの著作にかかわるものは、ここで選び出して引くことにする。5:0:3 ほかの人々は、歴史の話を書くなら、きっと戦いの勝利や、敵に対して立てた戦勝の記念を書き残したことであろう。また、将軍たちの手柄や、兵士たちの勇ましい働きを書き残したことであろう。その将軍や兵士たちは、子供や祖国やそのほかの財産のために、血と数えきれない殺し合いとで身を汚したのである。5:0:4 しかし、私たちの生き方について語る私の物語は、最も平和な戦いを永遠の碑に刻むであろう。魂の平和そのもののために戦われた戦いである。また、その戦いの中で雄々しく戦った人々を刻むであろう。彼らは、祖国よりも真理のために、最も親しい者たちよりも神を敬うことのために戦ったのである。その物語は、神を敬う闘士たちが堅く立ち向かったことと、多くの苦しみに耐えた勇気とを告げ知らせる。悪霊に対する戦勝の記念と、目に見えない敵に対する勝利も告げ知らせる。そして、これらすべての上に与えられた冠を、永遠の記憶のために告げ知らせるのである。

5:1:1 さて、ここで語る人々の競技場が設けられた地は、ガリアであった。その地の主要な町として名高く、そこのほかの町々にまさる町に、リヨンとヴィエンヌがある。ローヌ川が、この二つの町を通り、豊かな流れでその地全体をめぐって流れている。5:1:2 この地の最も名高い教会が、殉教者たちについての書きものを、アジヤとフルギヤの教会に送った。そして、自分たちのもとで起こったことを、次のように伝えている。5:1:3 私は、彼らの言葉そのものを引こう。ガリアのヴィエンヌとリヨンに寄留しているキリストのしもべたちから、アジヤとフルギヤにいる兄弟たちへ。この兄弟たちは、あがないについて、わたしたちと同じ信仰と希望とを持っています。父なる神と、わたしたちの主キリスト・イエスから、平安と恵みと栄光とがありますように。5:1:4 そのあと、これに続けてほかの前置きを述べてから、次の言葉で話の本題に入っている。さて、ここでの苦難の大きさと、聖徒たちに対する異邦人のこれほどの怒りを、わたしたちは詳しく語ることができません。幸いな殉教者たちが耐え忍んだすべてのことも、詳しく語ることができません。書きものに収めきることもできません。5:1:5 敵対する者が、あらんかぎりの力で襲いかかったからです。彼は、やがてはばかることなく行われる自分の来臨の前触れを、すでに見せていたのです。彼はあらゆるところに手を伸ばし、自分に属する者たちを慣らし、神のしもべたちに立ち向かうよう前もって鍛えました。そのため、わたしたちは家々や浴場や広場から締め出されただけではありません。それどころか、わたしたちのだれであれ、どんな場所であれ姿を見せることを、彼らはいっさい禁じたのです。5:1:6 しかし、神の恵みが、これを迎え撃ちました。恵みは弱い者たちを救い出し、堅い柱を立てて、敵に対抗させました。その柱は、忍耐によって、悪い者の攻撃をすべて自分たちに引き寄せることのできる人々でした。彼らは悪い者に真っ向から立ち向かい、あらゆる種類のそしりと刑罰に耐えました。彼らは多くの苦しみを少しのことと考えて、キリストのもとへ急ぎました。こうして、彼らは次のことをまことに示したのです。『今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない』（ローマ八・一八）。5:1:7 まず、彼らは、群衆が総

出で、山のように浴びせかけるものを、気高く耐え忍びました。罵声、殴打、引きずり回されること、略奪、石打ち、閉じ込められることです。そのほか、荒れ狂った群衆が敵や仇に対してするのが常である、あらゆることを耐え忍びました。5:1:8 それから、彼らは、千卒長と町を治める役人たちによって広場に引き出されました。そして、群衆全体の前で取り調べを受けて告白し、総督が来るまで牢に閉じ込められました。5:1:9 そののち、彼らが総督の前に引き出されると、総督はわたしたちに対してあらゆる残酷さをふるいました。そのとき、兄弟たちの一人ウェッティウス・エパガトスがいました。彼は、神に対する愛と隣人に対する愛とに満ちあふれていました。その生き方はたいへん厳格で、まだ若かったのに、年老いたザカリヤについての証しに並ぶほどでした。実際、彼は主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていました（ルカ一・六）。隣人に仕えるどんな務めにも、たゆむことがありませんでした。神に対する熱心にあふれ、霊に燃えていました。このような人でしたから、わたしたちに対してこれほど理に合わない裁きが行われるのを、こらえることができませんでした。彼は激しく憤り、自分も兄弟たちのために弁明する者として聞いてもらいたい、と願い出ました。わたしたちのあいだには、無神論のことも、神を敬わないことも何一つない、と弁明しようとしたのです。5:1:10 しかし、裁きの座のまわりにいた者たちは、彼に向かって叫び立てました。彼は名の知られた人だったからです。総督も、彼がこれほど正しく申し出た願いを聞き入れませんでした。ただ、彼もキリスト者なのか、とだけ尋ねました。彼がこのうえなくはっきりした声で告白すると、彼もまた殉教者たちの列に加えられました。彼は「キリスト者の弁護者」と呼ばれましたが、自分の内に弁護者を、すなわち霊を、ザカリヤにもまさって[1]持っていたのです。彼は、その霊を、愛に満ちあふれることによって示しました。兄弟たちを弁護するために、自分のいのちまでも捨てることを喜んだのです。彼は、キリストのまことの弟子であったし、今もそうだからです。彼は、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く者なのです（黙示録一四・四）。5:1:11 このときから、ほかの人々は見分けられていきました。最初の殉教者となる人々は、はっきりと姿を現し、備えができていることを示しました。彼らは、熱意を尽くして殉教の告白を全うしました。また、備えのない者、鍛えられていない者、まだ弱い者も明らかになりました。彼らは、大きな戦いの張りつめた力に耐えることができなかったのです。そのうちのおよそ十人が、流産した子のように倒れてしまいました。彼らは、わたしたちに大きな悲しみと計り知れない嘆きをもたらしました。また、まだ捕らえられていないほかの人々の熱意をくじきました。その人々は、あらゆるひどい目にあいながらも、殉教者たちのそばにいて、彼らから離れなかったのです。5:1:12 そのとき、わたしたちはみな、告白がどうなるか分からないために、ひどくおびえました。加えられる刑罰を恐れたのではありません。終わりを見つめて、だれかが脱落するのではないかと恐れたのです。5:1:13 しかし、日ごとに、ふさわしい人々が捕らえられて、脱落した者たちの数を満たしていきました。こうして、二つの教会の熱心な人々はみな集められました。ここの教会をとりわけ支えていた人々も、みな集められたのです。5:1:14 わたしたちの側の人々の召使いで、異教徒であった者も何人か捕らえられました。総督が、わたしたちを一人残らず捜し出すよう、おおやけに命じたからです。彼らは、サタンのたくらみにかかり、聖徒たちが受けているのを見た責め苦を恐れました。そして、兵士たちにそそのかされて、わたしたちについて偽りを言い立てました。テュエステスの食事、オイディプスの交わり、そのほか、わたしたちには口にすることも、思うことも許されないことです。それどころか、そのようなことがかつて人間のあいだで起こったとは、信じることさえ許されないことです。5:1:15 このことが言いふらされると、人々はみな、わたしたちに対して獣のように荒れ狂いました。そのため、以前は親しい間柄のゆえに穏やかにしていた人々も、そのときには激しく怒り、わたしたちに対していきり立ちました。こうして、わたしたちの主が言われたことが成就しました。『あなたがたを殺す者がみな、自分は神に仕えているのだと思う時が来るであろう』（ヨハネ一六・二）。5:1:16 それからは、聖なる殉教者たちは、どんな言葉でも言い表せないほどの刑罰を耐え忍びました。サタンは、彼らの口からも、何か中傷の言葉を言わせようと躍起になっていたのです。5:1:17 群衆と総督と兵士たちの怒りはすべて、度を越して、次の人々に襲いかかりました。ヴィエンヌから来た執事サンクトゥス。洗礼を受けたばかりでしたが、気高い戦い手であったマトゥルス。生まれはペルガモの人で、いつもここの教会の柱であり基礎であったアッタロス。そしてブランディナ

です。キリストは、ブランディナによって、次のことを示されました。人々のあいだで卑しく、見ばえがせず、さげすまれていると見えるものが、神のもとでは大きな栄光にふさわしいとされるのです。それは、神に対する愛のゆえです。その愛は、力のうちに示され、うわべを誇ることのない愛です。

訳注

1 『まさって』がなく、『ザカリヤの霊を』と読む写本もある。

1章 18〜32節　ブランディナ、サンクトゥス、ポティノス

5:1:18 実際、わたしたちはみな恐れていました。ブランディナの肉による女主人も、ひどく心配していました。この人も殉教者たちの一人で、ともに戦い手となった人でした。彼女は、ブランディナが体の弱さのために、はばかることなく告白することさえできないのではないかと心配したのです。しかし、ブランディナはたいへんな力に満たされました。そのため、朝から夕方まで代わる代わる、あらゆる方法で彼女を責めさいなんだ者たちは、疲れ果て、力が抜けてしまいました。彼らは、もう彼女にすることが何もなくなり、自分たちが負けたことを認めました。そして、体じゅうが裂けて傷口が開いているのに、彼女がまだ息をしていることに驚きました。彼らは次のことを証言しました。拷問の一つの種類だけでも、魂を去らせるのに十分だったのです。まして、このような、これほど多くの拷問なら、なおさらです。5:1:19 しかし、幸いな彼女は、気高い闘士のように、告白のうちに若返っていきました。彼女は「わたしはキリスト者です。わたしたちのところでは、悪いことは何一つ行われていません」と言い続けました。そう言うことが、彼女にとって力の回復であり、憩いであり、身に起こることの痛みを感じなくさせるものだったのです。5:1:20 サンクトゥスもまた、人から加えられるあらゆる責めを、並はずれて、どんな人にもまさって、気高く耐え忍びました。不法な者たちは、責め苦が長く続き、また激しいので、何か言ってはならないことを彼の口から聞けるだろうと期待していました。しかし、彼は自分の名さえ言わないほどの堅さで、彼らに立ち向かいました。民族も、出身の町も、奴隷か自由人かも言いませんでした。尋ねられることのすべてに、ラテン語で「わたしはキリスト者です」と答えたのです。彼は、名の代わりにも、町の代わりにも、生まれの代わりにも、すべての代わりにも、これを繰り返し告白しました。異邦人たちは、彼からほかの言葉を聞きませんでした。5:1:21 そのため、総督と責める役人たちは、彼に対してひどく意地になりました。もう彼にすることが何もなくなると、彼らはとうとう、真っ赤に焼けた銅の板を、彼の体のいちばん柔らかい部分に押し当てました。5:1:22 その部分は焼かれていきました。しかし、彼自身は曲がらず、屈せず、告白に堅く立ち続けました。天の泉が、彼を潤し、力づけていたのです。それは、いのちの水の泉です。その水は、キリストの腹から流れ出ています。5:1:23 そのあわれな体は、身に起こったことの証人でした。全身が傷と打ち傷で、引きつり、外から見える人の形を失っていました。キリストは、その体の中で苦しみを受けられ、大きな栄光を現されました。敵対する者を無力にされました。そして、ほかの人々の模範として、次のことを示されました。父の愛があるところには、恐ろしいものは何もありません。キリストの栄光があるところには、つらいものは何もないのです。5:1:24 実際、不法な者たちは、幾日かたってから、この殉教者をふたたび拷問にかけました。そのとき、彼の体は腫れ上がって炎症を起こし、手で触れられることにさえ耐えられないほどでした。そこで彼らは、同じ刑罰の道具を当てれば、彼に打ち勝てるだろうと考えたのです。あるいは、彼が責め苦の中で死んで、ほかの人々に恐れを起こさせるだろうと考えたのです。しかし、彼の身には、そのようなことが何一つ起こらなかっただけではありません。それどころか、人々の思いにまったく反して、そのあとの責め苦の中で、その体は身を起こし、まっすぐになりました。そして、もとの姿と手足の働きとを取り戻しました。こうして、二度目の拷問は、キリストの恵みによって、彼にとって刑罰ではなく、いやしとなったのです。5:1:25 また、ビブリアスという女がいました。信仰を否んだ者たちの一人です。悪魔は、彼女をもう飲み込んだと思っていました。しかし、中傷によっても彼女を罪に定めようとして、刑罰へと引き出しました。わたしたちについての、神を恐れぬ事柄を、むりやり言わせようとしたのです。彼女はもうもろくなっていて、意気地がないと考えたからです。5:1:26 しかし、彼女は拷問の中で我に返りました。いわば深い眠りから目を覚ましたのです。つかの間の懲らしめによって、地獄での永遠の刑罰を思い出したからです。彼女は、中傷する者たちに真っ向から

言い返しました。「この人たちは、物言わぬ獣の血さえ食べてはならないのです。そんな人たちが、どうして子供を食べたりするでしょうか」それからは、自分はキリスト者だと告白しました。そして、殉教者たちの列に加えられました。5:1:27 暴虐な刑罰の道具は、幸いな人々の忍耐をとおして、キリストによって無力にされました。すると、悪魔はほかのたくらみを考え出しました。牢の中の暗闇の、最もひどい場所に閉じ込めることや、足かせにはめた足を五つ目の穴まで広げさせることです。そのほか、怒り狂った下役たちが、しかも悪魔に満ちた下役たちが、閉じ込められた者に加えるのが常である、あらゆる責めです。そのため、大勢の人々が牢の中で息が詰まって死にました。主が、そのようにして世を去らせようと望まれた人々でした。主は、ご自分の栄光を示されたのです。5:1:28 実際、ひどく責めさいなまれた人々は、どんな手当てを受けても、もう生きられないと思われるほどでした。それでも彼らは、牢の中で生き続けました。人からの世話は何も受けられませんでしたが、主によって体も魂も元気づけられ、力づけられていました。そして、ほかの人々を励まし、慰めていました。一方、若く、捕らえられたばかりの人々は、体がまだ痛めつけられていませんでした。彼らは、閉じ込められることの重さに耐えられず、その中で死んでいきました。5:1:29 幸いなポティノスは、リヨンで監督の務めをゆだねられていました。年は九十歳を越え、体はたいへん弱っていました。もとからの体の弱さのために、やっと息をしているほどでした。しかし、殉教を強く望んでいたので、霊の熱意によって元気づけられていました。その彼も、裁きの座へ引きずられていきました。体は老いと病とで衰えきっていましたが、魂は彼の内に保たれていました。キリストが、その魂によって凱旋なさるためでした。5:1:30 彼は、兵士たちによって裁きの座へ運ばれました。町を治める役人たちと群衆全体が、彼を送っていきました。彼らは、まるで彼が主その人であるかのように、あらゆる罵声を浴びせました。その中で、彼はりっぱな証しを立てました。5:1:31 総督が、キリスト者の神とはだれなのか、と問いただすと、彼は言いました。「あなたがふさわしい者であれば、知るでしょう」それから彼は、容赦なく引きずり回され、さまざまな打撃を受けました。近くにいる者たちは、手や足であらゆる辱めを加え、彼の年齢さえ敬いませんでした。遠くにいる者たちは、めいめい手にしていた物を彼に投げつけました。だれもが、彼への乱暴に加わらない者がいれば、大きな過ちを犯し、神々を敬わないことになると考えていました。こうすれば自分たちの神々の仇を討てる、と思っていたのです。彼は、やっと息をしている状態で牢に投げ込まれ、二日後に息を引き取りました。5:1:32 そのとき、神の大きな計らいが起こり、イエスの計り知れないあわれみが現れました。それは、兄弟たちのあいだでまれにしか起こらないことでしたが、キリストの巧みなわざから外れたことではありませんでした。

1章 33〜48節　円形闘技場の戦い、立ち返った人々

5:1:33 実際、最初に捕らえられたときに信仰を否んだ者たちも、同じように閉じ込められ、恐ろしい苦しみをともにしていました。このときでさえ、否んだことは彼らに何の益にもならなかったからです。むしろ、自分が何者であるかをそのとおりに告白した人々は、キリスト者として閉じ込められました。ほかには何の罪も負わされませんでした。しかし、否んだ者たちは、今度は人殺しとして、汚れた者として拘留されました。そして、ほかの人々の倍も罰を受けていました。5:1:34 告白した人々は、殉教の喜び、約束されたものへの望み、キリストに対する愛、父の霊によって、心を軽くされていたからです。一方、否んだ者たちは、良心にひどく懲らしめられていました。そのため、引かれて通り過ぎるときにも、ほかのだれの目にも、その顔つきで彼らだと見分けがつくほどでした。5:1:35 実際、告白した人々は晴れやかに進み出ました。その顔には、栄光と大きな恵みとが混じり合っていました。そのため、鎖さえも、美しい装いとなって彼らの身を飾りました。それは、金糸で彩った縁飾りで着飾った花嫁のようでした。また、彼らはキリストのかおりを放っていました。そのため、ある人々は、彼らがこの世の香油まで塗っているのだと思ったほどです。一方、否んだ者たちは、うなだれ、みじめで、見苦しく、あらゆる恥にまみれていました。そのうえ、異邦人たちからも、卑しい者、臆病者とそしられました。人殺しの罪を負わされながら、尊く、栄光に満ち、いのちを与える呼び名を失っていたのです。ほかの人々はこれを見て、堅くされました。捕らえられた人々は、ためらうことなく告白しました。悪魔から出る考えなど、思い浮かべることさえありませんでした。5:1:36 彼らは、これに続けて間にいくらかのことを述べたあと、ふたたび次のように書き加えている。そののち、彼らの世を去るときの殉教は、あらゆる形に分かれていきました。実際、彼らは、さまざまな色と、あらゆる花とで、一つの冠を編み、父にささげたのです。気高い闘士たちは、さまざまな戦いを耐え忍び、大きな勝利を収めました。まことに、彼らは朽ちない大きな冠を受けるのがふさわしかったのです。5:1:37 さて、マトゥルスとサンクトゥスとブランディナとアッタロスは、獣のもとへ引かれていきました。公の場へ、異邦人の非道をさらす、皆の見世物へと引かれていったのです。獣と戦わせる見世物の日が、わたしたちの仲間のために、わざわざ設けられたのです。5:1:38 マトゥルスとサンクトゥスは、円形闘技場で、ふたたびあらゆる刑罰を受けていきました。それは、まるでそれまで何一つ苦しみを受けていない者のようでした。いや、むしろ、すでに幾度もの試合で相手を力ずくで退け、いまや冠そのものを懸けて戦っている者のようでした。彼らはふたたび、そこでのならわしである、鞭を持って並ぶ者たちのあいだを通らされました。獣に引きずり回されることも耐えました。狂った民衆が、あちこちから叫び立てて求めたことも、すべて耐えました。そして最後には、鉄の椅子に座らされました。その上で体が焼かれ、焼ける脂のにおいが彼らを包みました。5:1:39 しかし、民衆はそれでもやめず、ますます荒れ狂いました。殉教者たちの忍耐に打ち勝とうとしたのです。それでも、彼らはサンクトゥスから、ほかの言葉を何も聞きませんでした。聞いたのは、彼が初めから言い続けてきた告白の言葉だけでした。5:1:40 こうして、この二人は、大きな戦いの中で長いあいだ生きながらえましたが、ついにいけにえとしてほふられました。その日一日じゅう、剣闘士の試合のさまざまな出し物の代わりに、彼ら自身が世の見世物となったのです。5:1:41 一方、ブランディナは木に掛けられ、放たれる獣のえじきとしてさらされました。彼女は十字架の形に掛けられていました。その姿が見えることによって、また、力のこもった祈りによって、彼女は戦う人々に大きな熱意を起こさせました。彼らは、戦いのさなかに、この姉妹をとおして、外の目でも、自分たちのために十字架につけられたかたを見たのです。そのかたは、ご自分を信じる人々に、次のことを確信させようとされたのです。キリストの栄光のために苦しみを受ける者はみな、生ける神といつも交わりを持つのです。5:1:42 そのとき、獣は一頭も彼女に触れませんでした。そこで彼女は木から降ろされ、

ふたたび牢に連れ戻されました。ほかの戦いのために取っておかれたのです。それは、さらに多くの鍛錬をとおして勝利を収め、曲りくねる蛇に対する刑の宣告を取り消しのきかないものにするためでした。また、小さく、弱く、さげすまれていた彼女が、兄弟たちを励ますためでした。彼女は、大いなる、打ち負かされることのない闘士キリストを着ていました。そして、幾度もの試合で敵対する者を力ずくで退け、戦いによって、朽ちない冠をかぶるためでした。5:1:43 アッタロスもまた、群衆から出せとしきりに求められました（名の知られた人だったからです）。彼は、良心にやましいところがなかったので、備えのできた戦い手として入って来ました。キリスト者の隊列の中で、まことに鍛えられていたからです。また、わたしたちのもとで、いつも真理の証人であったからです。5:1:44 彼は円形闘技場をひと回り引き回されました。前には札が運ばれ、そこにはラテン語で『これはキリスト者アッタロスである』と書かれていました。民衆は、彼に対して激しく猛り立っていました。ところが、総督は、彼がローマの市民であることを知ると、牢にいるほかの人々とともに彼を連れ戻すよう命じました。総督は、この人々についてカイザルに書き送って、その裁定を待っていたのです。5:1:45 その間の時は、彼らにとって、むだでも、実りのないものでもありませんでした。それどころか、彼らの忍耐をとおして、キリストの計り知れないあわれみが現れました。実際、生きている者たちによって、死んでいた者たちが生かされました。殉教者たちが、殉教者とならなかった者たちに恵みを施しました。そして、処女である母に、大きな喜びが生まれました。死んだ子として流産した者たちを、生きた子として取り戻したからです。5:1:45 実際、否んだ者たちの大部分は、殉教者たちによって、もう一度母の胎に宿されました。もう一度身ごもられ、もう一度いのちの火をかき立てられました。そして、告白することを学びました。彼らは、いまや生きた者となり、力をみなぎらせて、裁きの座に進み出ました。総督からもう一度尋問を受けるためでした。罪人の死を望まれず、悔い改めのために慈しみを示される神が、彼らに甘い味わいを与えてくださったのです。5:1:47 実際、カイザルは、この人々は処刑し、もし否む者がいれば放免せよ、と書き送ってきました。ちょうど、ここの祭りが始まろうとしていました。この祭りには、あらゆる部族の人々が集まってくるので、たいへんな人出になります。総督は、幸いな人々を裁きの座へ引き出し、群衆の前で見世物にし、さらし者にしました。そのため、もう一度尋問したのです。そして、ローマの市民権を持っていると思われる者はみな首をはね、ほかの者たちは獣のもとへ送りました。5:1:48 以前に否んだ者たちが、そのとき、異邦人の思いに反して告白しました。そのため、キリストは大いにあがめられました。実際、この者たちは、いかにも放免されるかのように、別に尋問を受けました。しかし、彼らは告白して、殉教者たちの列に加えられました。外に残ったのは、かつて一度も信仰の跡さえ持たず、婚礼の衣に気づきもせず、神を恐れる思いもなかった者たちです。それどころか、彼らはその生き方によって、道を汚していました。すなわち、滅びの子らです。

1章 49〜63節　アレクサンドロスとアッタロス、ブランディナの最期、遺体への辱め

5:1:49 ほかの人々は、みな教会に加えられました。この人々が尋問を受けているとき、アレクサンドロスという人が裁きの座のそばに立っていました。彼は、生まれはフルギヤ人で、医者を仕事としていました。長年ガリアに住み、神に対する愛と、大胆に語ることとで、ほとんどだれにでも知られていました（使徒の賜物にもあずかっていたからです）。彼は、うなずいて、この人々に告白をうながしていました。その様子は、裁きの座を取り巻いて立つ人々の目にも明らかで、まるで産みの苦しみをしているかのようでした。5:1:50 群衆は、以前に否んだ者たちがふたたび告白するのに憤りました。そして、アレクサンドロスがそうさせているのだと思って、彼に向かって叫び立てました。総督は彼を呼び止め、何者かと尋問しました。彼が「キリスト者です」と答えると、総督は怒って、彼を獣の刑に定めました。彼は、翌日、アッタロスとともに入って来ました。実際、総督は、群衆の歓心を買おうとして、アッタロスもふたたび獣に引き渡したのです。5:1:51 二人は、円形闘技場で、刑罰のために考え出されたあらゆる道具を受けていきました。そして、きわめて大きな戦いを耐え忍び、最後には、彼らもまたいけにえとしてほふられました。アレクサンドロスは、うめき声も、つぶやきも、まったく漏らしませんでした。ただ、心の中で神と語り合っていました。5:1:52 一方、アッタロスは、鉄の椅子に載せられ、焼かれていました。体から焼ける脂のにおいが立ちのぼったとき、彼は群衆に向かってラテン語で言いました。「ご覧なさい。あなたがたがしていること、これこそ人を食べることです。わたしたちは人を食べませんし、ほかのどんな悪いこともしていません」神の名は何かと問われると、彼は答えました。「神には、人間のような名はありません」5:1:53 これらすべてのあと、剣闘士の試合の最後の日に、ブランディナはふたたび連れ込まれました。十五歳ほどの少年ポンティクスもいっしょでした。この二人は、ほかの人々が罰を受けるのを見せるために、毎日連れて来られていました。そして、彼らの偶像にかけて誓うよう強いられていました。しかし、二人は揺るがずに踏みとどまり、彼らをないがしろにしました。そのため、群衆は二人に対して荒れ狂いました。少年の年をあわれむことも、か弱い女をはばかることもしなかったほどです。5:1:54 人々は、二人をあらゆる恐ろしい目にあわせました。あらゆる刑罰をひと巡り受けさせ、くり返し誓うよう強いました。しかし、そうさせることはできませんでした。実際、ポンティクスは、姉妹に励まされていました。彼女が彼をうながし、堅く支えているのが、異邦人たちにも見えるほどでした。そして、彼はあらゆる刑罰を気高く耐え忍び、息を引き取りました。5:1:55 一方、幸いなブランディナは、すべての人の最後に残りました。彼女は、子供たちを励まし、勝利者として王のもとへ先に送り出した、気高い母のようでした。彼女自身も、子供たちが戦ったすべての戦いを、同じように戦い抜きました。そして、世を去ることを喜び楽しんで、彼らのもとへ急ぎました。それは、獣の前に投げ出された者ではなく、婚宴に招かれた者のようでした。5:1:56 鞭のあと、獣のあと、鉄の椅子のあと、最後に彼女は網かごに入れられ、雄牛の前に投げ出されました。彼女は、牛に幾度も宙へ放り上げられました。しかし、もはや身に起こっていることを感じてもいませんでした。信じてきたものへの望みと、それを堅く保つこと、そしてキリストとの語らいのためです。こうして、彼女もまた、いけにえとしてほふられました。異邦人たち自身も認めました。自分たちのところで、これほどのことを、これほど多く受けた女は、かつて一人もいなかったのです。5:1:57 しかし、それでもなお、彼らの狂気と、聖徒たちに対する残忍さは、飽き足りませんでした。荒々しい獣にかき乱された、荒々しく野蛮な種族は、容易には静まらなかったからです。そして、彼らの暴虐は、残された体に向かって、また新たに始まりました。5:1:58 実際、打ち負かされたことは、彼らを恥じ入らせませんでした。人間らしい思慮を持っていなかったからです。それどころか、かえって、獣のような彼らの怒りを燃え上がらせました。総督も民衆も、わたしたちに対して同じように不当な憎しみを示しました。それは、『不法

な者はさらに不法を行い、義なる者はさらに義とされよ』という聖書が成就するためでした（黙示録二二・一一）。5:1:59 実際、彼らは、牢の中で息が詰まって死んだ人々を、犬に投げ与えました。そして、だれ一人わたしたちに葬られることのないように、夜も昼も注意深く見張りました。さらに、獣と火が残したものをさらしました。あるものは引き裂かれ、あるものは黒焦げになっていました。ほかの人々の首も、切り離された体とともに、同じように葬らずにおきました。そして、幾日ものあいだ、兵士たちに念入りに見張らせました。5:1:60 ある者たちは、彼らに向かって激しく怒り、歯ぎしりをしました。彼らから、さらに重い報いを取り立てようとしたのです。ほかの者たちは、あざ笑い、からかいました。そうしながら、自分たちの偶像をあがめ、偶像がこの人々を懲らしめたのだと言いました。また、比較的穏やかで、いくらか同情しているように見えた別の者たちも、さんざんにそしって言いました。「彼らの神はどこにいるのか。自分のいのちよりも選んだあの宗教は、彼らに何の役に立ったのか」5:1:61 彼らの側のありさまは、このようにさまざまでした。一方、わたしたちの側は、大きな悲しみに沈んでいました。体を土に葬ることができなかったからです。実際、夜もそのために力を貸してくれず、金も彼らを説き伏せず、嘆願も彼らの心を動かしませんでした。彼らは、あらゆる手を使って見張りました。体が葬られなければ、何か大きな得をするかのようでした。5:1:62 彼らは、これに続けて、ほかのことを述べたあと、次のように言っている。こうして、殉教者たちの体は、あらゆる仕方でさらしものにされ、六日のあいだ野ざらしにされました。そののち、不法な者たちによって焼かれて灰にされ、近くを流れるローヌ川に掃き捨てられました。地上にもはや彼らの遺骸のかけらさえ見えないようにするためでした。5:1:63 彼らがこうしたのは、神に打ち勝ち、殉教者たちから新しく生まれることを奪えると考えたからです。彼らの言い分は、こうでした。「あいつらが復活の望みさえ持てないようにするのだ。あいつらは、その望みに頼って、奇妙な新しい宗教をわれわれのところに持ち込んでいる。そして、恐ろしい目をあなどり、進んで、しかも喜んで死に向かっている。さあ、あいつらがよみがえるかどうか、あいつらの神があいつらを助け、われわれの手から救い出せるかどうか、見てやろう」

2〜4章　殉教者たちのへりくだりと愛、アルキビアデス、エイレナイオスの推薦

5:2:1 先に述べた皇帝の時代に、キリストの諸教会に起こったことは、このようなものであった。ここから、ほかの属州で行われたことも、筋の通った考えによって推し量ることができる。これに、同じ書から別の言葉を書き添えるのがよいだろう。そこには、先に述べた殉教者たちの寛容と、人へのいつくしみが、次のような言葉そのままで書き記されている。5:2:2 彼らは、キリストを熱心に慕い、ならう者となりました。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべきこととは思われませんでした（ピリピ二・六）。彼らは、それほどまでにこのかたにならったのです。彼らは、これほどの栄光のうちにありました。一度や二度ではなく、何度も証しを立てていました。獣の前からふたたび引き戻され、焼き傷と打ち傷と傷とを身に負っていました。それでも、このかたにならっていたので、自分から殉教者と名のりませんでした。わたしたちにも、その名で彼らを呼ぶことを許しませんでした。それどころか、わたしたちのだれかが、手紙や口頭で彼らを殉教者と呼ぶことがあると、きびしくとがめました。5:2:3 実際、彼らは、殉教者という呼び名を、喜んでキリストに譲っていました。キリストこそ、忠実で真実な証人（殉教者）であり、死人の中から最初に生れたかた、神のいのちの君だからです（黙示録三・一四、一・五、使徒三・一五）。また、彼らは、すでに世を去った殉教者たちを思い起こして言いました。「あの人々こそ、もう殉教者です。キリストは、あの人々を、告白のうちに天に迎えられるにふさわしいとされました。そして、あの人々が世を去ることによって、その証しに封印をなさいました。けれども、わたしたちは、取るに足りない、卑しい告白者にすぎません」そして、涙ながらに兄弟たちに願いました。自分たちが全うされるように、熱心に祈ってほしいと頼んだのです。5:2:4 彼らは、殉教の力を、行いによって示していました。すべての異邦人に対して大胆に語り、忍耐と、恐れず、おののかない態度とによって、その気高さを明らかにしていました。一方、兄弟たちのあいだで殉教者と呼ばれることは、断っていました。神への恐れに満たされていたからです。5:2:5 また、少しあとで、彼らは次のように言っている。殉教者たちは、力強い御手の下に、自らを低くしていました（第一ペテロ五・六）。今、彼らは、その御手によって大いに高くされています。そのころ、彼らはすべての人のために弁明しましたが、だれをも訴えませんでした。すべての人を解きましたが、だれをも縛りませんでした。そして、ひどい仕打ちをする者たちのために祈りました。完全な殉教者ステパノが『主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい』と祈ったのと同じです（使徒七・六〇）。ステパノが、石を投げつける者たちのためにさえ願ったのなら、兄弟たちのためには、なおさらではありませんか。5:2:6 また、ほかのことを述べたあと、次のように言っている。実際、愛がまことのものだったので、彼に対する彼らの最も大きな戦いは、次のようなものとなりました。獣が息を詰まらせ、前に飲み込んだと思っていた人々を、生きたまま吐き出すようにするのです。実際、彼らは、倒れた人々に対して誇りませんでした。かえって、自分たちが豊かに持っているもので、足りない人々を助けました。母の心を持ち、その人々のために、多くの涙を父の前に注ぎました。5:2:7 彼らはいのちを求めました。すると、神は彼らにそれをお与えになりました。彼らは、それを隣人たちとも分け合いました。彼らは、すべてに対する勝利者として、神のもとへ去りました。いつも平和を愛し、いつも平和を勧めてきた彼らは、平和のうちに神のもとへ行ったのです。母には苦しみを、兄弟たちには争いと戦いを残しませんでした。残したのは、喜びと平和と一致と愛でした。5:2:8 あの幸いな人々は、つまずき倒れた兄弟たちに愛情を寄せた。これらの言葉も、それを伝えるものとして、ここに書き添えておくのが有益であろう。のちに、キリストの肢体に容赦なくふるまった人々がいたからである。その人々の心は、人の情けを欠き、あわれみを知らないものであった。

5:3:1 先に述べた殉教者たちについての同じ書は、記憶にとどめるべき別の話も伝えている。これを読む人々に知らせることを、惜しむ理由は何もないだろう。それは次のとおりである。5:3:2 実際、彼らの中に、アルキビアデスという人がいました。彼は、きわめて切り詰めた暮らしをしていました。以前から、ほかのものはまったく口にせず、ただパンと水だけをとっていました。牢の中でも、そのように過ごそうとしていました。アッタロスは、円形闘技場で最初の戦いを終えたあと、啓示を受けました。アルキビアデスは、神の造られたものを用いず、ほかの人々につまずきの手本を残している。それはよくない、という啓示でした。5:3:3 アルキビアデスは、それに従い、何でも遠慮なく口にして、神に感謝するようになりました。実際、彼らは、神の恵みに顧みられずにいたのではありません。聖霊が彼らの助言者だったのです。このことは、これくらいにしておこう。5:3:4 フルギヤには、モンタノスとアルキビアデスとテオドトスの一派がいた。彼らは、ちょうどそのころ初めて、自分たちが預言をしているという見方を、多くの人々のあいだに広めていた。実際、神の賜物による驚くべきほかのわざも、まだそのころ、さまざまな教会で数多く行われていた。それが、多くの人々に、この人々も預言をしていると信じさせたのである。そして、この人々について意見が分かれていた。そこで、ガリアの兄弟たちは、この人々についても、自分たちの敬虔で、きわめて正統な判断を、ふたたび書き添えた。彼らは、自分たちのところで全うされた殉教者たちの、さまざまな手紙も示した。殉教者たちが、まだ鎖につながれていたときに、アジヤとフルギヤの兄弟たちにあてて書き送ったものである。それだけでなく、殉教者たちは、当時のローマの監督エレウテロスにも書き送った。教会の平和のために、とりなしをしたのである。

5:4:1 同じ殉教者たちは、エイレナイオスも、先に述べたローマの監督に推薦した。エイレナイオスは、そのころすでに、リヨンの教区の長老であった。殉教者たちは、この人のことを大いに証しした。そのことは、次のような言葉が示している。5:4:2 父エレウテロスよ。あなたが、神にあって、すべてにおいて、いつも喜びのうちにあるよう祈ります。わたしたちの兄弟であり仲間であるエイレナイオスに、この手紙をあなたのもとへ届けるよう頼みました。どうか、彼を、わたしたちが推薦する者として受け入れてください。彼は、キリストの契約に熱心な人です。もし地位が人に義をもたらすと知っていたなら、わたしたちは、何よりもまず、彼を教会の長老として推薦したはずだからです。実際、彼は長老なのです。5:4:3 先に述べた書にある、殉教者たちの一覧を、ここに並べる必要があるだろうか。一覧には、首を切られて全うされた人々が、別に記されている。獣の餌として投げ与えられた人々も、別に記されている。さらに、牢の中で眠りについた人々も記されている。そのころまだ生き残っていた告白者たちの数も、ここに挙げる必要があるだろうか。望む人は、その書を手に取れば、これらのことも、たやすく、きわめて詳しく知ることができるからである。その書も、先に述べたとおり、私が殉教者たちの記録集に収めておいた。アントニヌスのもとでのことは、以上のとおりである。

リヨンとヴィエンヌの教会の手紙

2026年11月23日版
著者　リヨンとヴィエンヌの教会
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/martyrs-of-lyons/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/martyrs-of-lyons
全文を、エウセビオス『教会史』五巻のギリシア語原文（Ἐκκλησιαστικὴ ἱστορία）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。